

兵庫県南部地震から一年

被災の記念日を「阪神ルネサンスの日」に

昨年一月十七日の阪神大震災（兵庫県南部地震）で創価学会（秋谷栄之助会長）は、地震発生直後に東京・新宿区信濃町の学会本部と大阪市天王寺区の関西文化会館に災害対策本部を設置、幹部をはじめ多くの会員ボランティアが昼夜を徹しての救援活動にあたり、その迅速かつ大規模な活動は海外のマスコミからも称賛された。

被災地の創価学会の会館はすべて被災者の避難所となったが、このうち兵庫県の中心会館である兵庫池田文化会館（神戸市中央区浜辺通六ノ三ノ一六）は、全国から寄せられた救援物資を避難所となっている各会館に配送するなど、被災地での救援活動のコントロールセンターとしてフル稼働。当時、兵庫総県青年部長だった野田武志兵庫池田文化会館事務長は、大阪の対策本部（本部長＝西口良三関西長）や大西正人兵庫総県長と連携を取りながら、センターの責任者として不眠不休で救援活動を続けた。

ポートアイランド（神戸市中央区沖の人工島）に住み、自らも被災者である野田事務長に、震災から一年を振り返ってもらい、今後の被災者支援や宗教団体の社会貢献のあり方について語ってもらった。

綺麗な街が「死の街」に

会館避難者 八割まで非会員

創価学会・兵庫池田文化会館 野田武志事務長に聞く

震災当日は激しい揺れで、外に出てみると道路がグニャグニャになっていました。ポートアイランドにはガスや水道の本管が通っており、これら生活上のライフラインの破壊はひどかったですね。

私と家内の二人の祖母と二人の子供の計六人がマンションの前にある港島小学校へ避難するのが本当にたいへんでした。

とにかく状況がわからなかったですから、兵庫池田文化会館で連携を取り合おうと、午前七時ごろには島を出ました。

会館に着いたのは八時半ごろでしょうか。会館の前にはフラワーロードという大きな通りがあり、周辺はいつもは非常に活気があって綺麗な街並みなのですが、もう「死の街」でした。

このため本来、この会館は多くの人を受け入れられるところなのですが、周辺は人が近寄り難い状況になっていましたから、市民はみな山の方へ、また公園へと避難していました。

創価学会は神戸市内には長田区、須磨区、中央区、灘区、東灘区などに会館があり、多くの被災者が避難されていました。そのうち学会の会員さんは二割程度で、あとは地域の方々です。この五つの会館だけで避難者は多いときで三千数百人。これだけの食料を確保するのはたいへんなことです。

大変な量の物資ですから、それを降ろさずにトラックのまま行き先を指示できればよかった、と今だから言えますが、当初は電話が不通で他の会館との連携どころではない。一つの会館に水ばかりもっていくわけにもいきませんから、まず物資を全部降ろして、それをボランティアの同志がバイクや車であちこちの避難所へ運ぶんです。兵庫県下、大阪をはじめ関西一円から、また全国各地からたくさんのボランティアが来られ、自分の仕事や生活も顧みないでやってくださった。

各地の被災状況が詳しく判明するにつれて被災者の要望をもとに物資を選別し、各避難所への配送をコントロー

ルできるようになりました。また兵庫池田文化会館の目の前に神戸市役所があるのですが、市役所にいた避難者の方々にも、おにぎりやお水、毛布などを持っていてもらいました。

「宗教団体は公共性の自覚を」と語る野田事務長 = 【写真は省略】

神戸市内の仮設住宅訪問 人間的触れ合いを

住む場所は離れても心は離れず

あの一月十七日、五時四十六分の強烈な実体験は今でも脳裏にこびり付いており、今後またぶん生涯にわたって、多大な影響を受けていくのではないかと思います。このたびの大震災の中で、この世のものとは思えぬ乗り越え難い悲しみや、絶望と失望が洪水のように押し寄せる日常のなかにあって、思うように救援活動がはかどらず、亡くなっていく人たちをどうすることもできなかった無力感に茫然自失となったことを、今でも痛みを伴った記憶として、心の中にドッカとあります。

あの震災からまもなく一年が経ちます。信仰者としてあの震災体験、そしてその後の復興活動に対して何をどう感じ、また自らの責務として今後いかに取り組んでいくのかとの観点から私自身の意見を稚拙ながら述べて参りたいと思います。

現実的な問題はたくさんあります。よく報道されている仮設住宅の問題や公的扶助のあり方、高齢者や肉親を亡くした人たちの精神的なケアをどうしていくか等々。

私は行政的な問題は素人によくわかりませんが、今回の震災で日ごろは分からなかったことがいろいろと露呈しています。

例えば今回の震災でほとんど壊滅した老朽住宅の問題があります。関東では関東大震災以降、住宅に対する見直しがあったのですが、阪神地域では震災等の大きな災害が少なく、老朽化した木造住宅に関して、社会的な問題や抜本的な見直し等もなされてきませんでした。

しかし本来はもっと行政が老朽住宅に対する手当てや、防災上の公共サービスの中身を考えていくべきではなかったか。神戸は表向きは非常に綺麗な街なのですが、生活や福祉の観点から見れば非常にお粗末だったと思います。

神戸市内には東灘区や北区、中央区、西区の大仮設住宅をはじめとして各区にも仮設住宅が点在しています。これら仮設住宅の入居者は住み慣れた街や人間関係から離れ、まったく違う環境の中で精神的に大変な御苦労をされています。

このため私たちは遠方の仮設住宅に入居された方々に対して、励ましの声をかけていく運動を震災以来ずっと続けています。

仮設住宅に入居している同志の方たちや会員以外の方にも、高齢者で食事の確保もたいへんな方たちなどに声をかけ、食事や日用品を提供しています。“住む場所は離れても心は離れてないよ、元の人間関係は変わってないよ”という励ましを仮設住宅が一軒残らずなくなるまで続けようというのが兵庫県創価学会同志の考え方なんです。

仮設住宅でお困りの問題など行政よりも我々の方がずっとよく知っています。しかし行政の批判をしているだけでは現実的な解決にはなりません。震災を生き抜いた立派な方たちです。経済的にも環境的にも厳しい現実との闘争の中で、少しでも人間的なあたたかい触れ合いを通してお役に立てれば、との思いからの運動です。

到着した救援物資を運び込む創価学会青年部員 = 兵庫県西宮市の西宮地田講堂で 【写真は省略】

冬迎え健康セミナー

「元気、ちゃんと食べてますか」と、わずかな時間の訪問ですが、往復に数時間をかけて、励ましの取り組みを

しております。また仮設住宅の周辺地域の会員の方々は、ボランティア精神で日常的な生活上のケアや心のケアに熱心に取り組まれています。

仮設住宅の問題は長期間の問題になりますから、一時的に相談を聞いたりということだけではありません。震災から二回目の冬を迎えるにあたり、先日も長田文化会館で、ドクター部の医師を招いて高齢者等の被災者を対象に防寒対策や健康、栄養を考えるセミナーを開きました。

私もいま仮設住宅を訪問していて感じるのですが、最初の何百人と収容されている避難所には、“あの人も私も今、同じ場所で生活している”という意味で、同じ境遇にいる一種の共感がありました。それに比べて仮設住宅は、壁を見る以外に見るものがないという本当に狭い仕切られた部屋です。こういう環境の中で特に高齢の方に精神障害を起こしている方を見受けることがあります。喜怒哀楽が普通に出ない。人間本来の感情が非常に抑制されてしまっている人がいらっしまった。

このような精神障害的な現象が社会現象としていま起こりつつあります。正常ではない状況が放置され、異常な状況にマヒしてしまう現象が仮設住宅地域をはじめとして少なからず発生しています。社会性としての障害や人間の精神性としての障害など、目には見えない何かが崩れ始めている。その現象をどう深くとらえ洞察していくか。これは信仰者の義務だと思います。

しかし、これは一宗教団体で完結する問題ではありません。社会の中で今、目に見えないものが崩壊しつつある現象をくい止めて、健全な社会をつくっていくこと。これが本来の復興だと思われます。

人間不信の払拭が急務

「市民文化」担う活力とり戻せ

行政に文句を言って、行政がいろいろと措置をとったらそれで解決するのかというと、それでは補えない何かがある。制度と制度の間に埋まっている矛盾があるんです。そういうものを見いだして、本来の人間社会のあり方を提言したり、市民レベルでの草の根的な対話を通して教育啓蒙的な運動を展開していくことが、宗教団体としての責務であると痛感いたします。

仮設住宅での感情面の抑圧にしても、それは行政の問題というより、人間の扱い方の問題だと思うんです。問題はいろいろあるにせよ、行政の方はあの仮設住宅をよくあれだけ急ピッチでおつくりになったと思います。取りあえずつくったということでしょう。しかし仮設住宅を計画した人が“人間の扱い方”をもう少し分かっていたらなあと思います。例えば住宅の中に広場のようなコミュニティーの場所をつくるとか。仮設とはいえ、とりあえずは一年か二年かは住まなくてはならないのですから、人間が住むところだという配慮がもう少し欲しかった。

基本的な感情が抑制されているのは人間に対する不信感の表われだと思います。この人間不信がいま非常に蔓延している。大震災という特殊事情があるのは当然ですが、生活環境の激変や人間関係のトラブル、将来に対する失望感等々が折り重なって、非常に複雑な“悩みの構造”が他者に対して不信感を増幅させているように思えます。この不信感の原因は何も被災者や仮設住宅入居者の事情によるものではなく、また行政だけの責任でもないでしょう。私の実感としては、一個の人間が多年にわたって慣れ親しんだ生活環境との関係性や、長年続けてこられた人間関係などの「関係性の絆」が断ち切られてしまうと、ノーマルな感情さえ障害を帯びてしまうのではないかと思います。

こういう人間不信をいかに払拭していくか。結局、一対一の人間関係を基盤にして、一人の弱者を守るために社会、行政等がどのようにコミュニケーションを取るかにかかっていると思います。

いま神戸では“復興”をブランドにしていこうという匂いさえ感じます。震災以上に大変な問題が現実にはたくさんあります。現場の被災者同士に家が崩れた、どっちの問題だ、などと私権の複雑な衝突が起こったりしているのです。

近代文明社会の中で三百万人近くが住む都市の機能が一瞬にして麻痺するような地震は、これまでどこにもな

かったでしょうが、崩れた建物は時間とお金はかかるが復興はできます。

しかし都市の中には市民が何十年とかけて育んできた無形の文化財がたくさんある。長田のケミカル・シューズなども市民が長年、工夫して自ら作り上げた「文化」です。それをもう一度とり戻すには生活意欲、労働意欲といった市民の活力を沸き上がらせ、逞しくしていくような手当ても必要になってきます。

物心両面のケアと共に

教団に問われる「公共の思想」

神戸が完全に復興するまで少なくとも十年はかかるでしょう。震災直後の緊急避難的な救援活動に代わって、今後数年間にわたる物心両面のケアをどのように行なっていくのかという問題が、まだまだ検討されなければならない。

宗教団体として、創価学会として被災者をどのように応援しつづけていくのか。また一信仰人である私自身がどのように被災者を支援していけるのか。団体と個人の両面で前向きに考えていかねばならないと思います。

とにかく市民グループの方たちのアドバイスなどもいただきながら、できることは何でもやらせていただくつもりです。また神戸市や兵庫県が公共的なサービス、公的な援助を今後どう考え、行なっていくのかも、私たちは一市民としてしっかりと監視していこうと思っています。

震災以来、救援活動をやりながら、「公共性」という言葉がずっと私の頭にこびりついていきます。震災から一年がたちますが、「公共」という概念、思想性を宗教団体は様々な角度から議論し、もっとしっかりとアピールしていかなければならないのではないのでしょうか。

簡単に言いますと、我々は自由を束縛されると非常に窮屈な思いをする。それが制限されるとすぐに気付いて“なぜだ”ということになる。ところが公共性が衰退していくということは、よほど思想的に成熟していないと実感できない問題性があります。創価学会では、日常活動として取り組んでいる教学運動や文化活動を通して公共性、公益性を支える思想を学び、また広く社会に対しても啓蒙していこうと取り組んでいます。

なにも行政面だけの公共ではありません。公共というのは自分だけでなく、他のすべてのものを心から尊重していくという考え方です。仏法の思想性から言えば、生命尊厳という思想を主軸として、涅槃経に説かれる悉有仏性（仏性内在説）、さらに縁起観や相依相待の関係性などが、「公共」を支える思想性として重要と思われます。

多くの人たちやあらゆる自然環境と一緒に自分たちの生命体が保たれているという思想性、あるいは宗教的な自覚について、宗教団体に入る入らないではなく、もっとオープンに議論し、対話をしていかねばならないと思います。

今回の震災で神戸市や兵庫県、国家に対して言いたいことはたくさんありますが、現状の行政能力ではキャパシティを超えていた部分があるのは事実です。ただ被災され避難された人の心の痛みを本当に感じているなら、もっと迅速な救援ができたと思うんです。

「公共」配慮の文化で

阪神地域を世界の範に

高齢者など一部の被災者だけでも一時、疎開させて基本的なライフラインを急ピッチで復興させていくことも、私は行政のリーダーシップがあればできたと思う。

悉有仏性や縁起観、依正不二といった様々な仏法思想がありますが、こうした仏法的観点から私自身の考えとして今後の行政に対する要望をまとめますと、被災した阪神地域からぜひとも世界の模範となれるような「公共性」

の意識、配慮が高い都市文明を新たに創造していただきたいと痛切に感じています。

宗教団体にしても、他者の命の痛みを感じていけるような人間本来の感性が乏しく、この痛みを和らげることに貢献できないならば、いくら勢力があり、立派そうなことを言っても宗教団体としての存在意義が問われると思います。何も教勢を拡大することが宗教団体の目的ではなく、悩める民衆の中に入って、抜苦与楽の草の根的な運動の中に宗教団体の骨格があると思います。

他者の生命尊重する土壌に

他者の生命の痛みを感じ、同苦する中に内発的な共感性が生まれ、他者を尊重する土壌が形成されていくと思います。宗教的自覚と信念に裏打ちされた実践をもとに他者を尊重し、人権を尊重していく社会的土壌を創価学会の文化運動を通して構築していきたいと自負しています。

創価学会に対して批判していただくことは有り難いことなんです。私たちは反論のための反論ではなく、生命の尊厳や、自分以外のものを自分以上に尊重する心といった公共性を支える概念を、信仰の有無を問わず、世の中の人たちに広く訴えていきたい。

被災者に豚汁を振る舞う＝西宮池田講堂で【写真は省略】

「人間本来の活力」復興へ

道徳では深い思想の根付けがありません。自発的、能動的な振る舞いを生み出すような自覚を促すところまでいきません。

さらに施設的な意味から公共性について言えば、例えば創価学会の会館なども公共的な施設だと自覚しています。震災の時に多くの人に避難所として使っていただくことは当たり前のことで、その方たちのために救援物資を調達してくるのも当たり前のことです。

こういう宗教団体の施設が公共性を帯びた施設であるという見解を、各教団がお互いにもてるようになると、災害時などでもっと連携がとれると思うんです。これは創価学会でも今後、話し合っていかなければならない問題ですが、いざという緊急時に宗教団体がいかに社会貢献できるかは、宗教団体として非常に厳しく問われなければならないと思います。

また宗教団体には公益性があります。例えば税金を払っている一人の市民が最期を迎えたとき、その最期をケアすることは行政側にも一面の責任があると思います。宗教団体は一個の人間の最期について葬儀等の段取りをする。これは本来、国家がもう少し面倒を見なければいけないけれども、そこまでは実際面で不可能な対応ですから、信仰を同じくする同志として、また深い人間関係をもつ友として葬儀（友人葬）のお手伝いをやらせていただく。これは宗教活動のもつ公益性の一つの側面だと思います。

震災後一年がたち、今後の宗教団体の社会貢献のあり方が問われています。目には見えないが崩れているもの、制度間のひずみや制度の間に漏れている大事なもの、市民の活力、人権の尊重を基調とした豊かな「公共性」をもつ社会と、それを支える思想性、そして宗教団体としての公益性のあり方、等々。大震災を被った兵庫県の創価学会の一員として、今年はさらなる復興への一步を多くの方々と共に踏み出しながら、悩める友、不安を抱く庶民の中で、人間として最も大切な問題の解決に向けて闘っていききたいと決意しております。

池田大作名誉会長は阪神地域の一月十七日を、「阪神ルネサンスの日」にしようと決めてくださいました。「ルネサンス」はヨーロッパの文芸復興からとったものですが、震災からの復興だけではなく人間本来の活力、ダイナミズムを今こそ被災を受けた阪神地域から復興しようという意義が込められています。

私たちはこの日を自分たちの大きな「成長の日」にするために、今後も力強く運動に取り組んでいきます。

救援活動のコントロールセンターとなった神戸市中央区・兵庫池田文化会館【写真は省略】
